◉ 連合会だより

「環境を守り育てる『よい仕事』」―「食」と「農」にとりくむ労働者協同組合―というルポを協同組合経営研究所の河野直践さんが95年７月号に載せ、島根と粕屋の事業団の例を紹介してくれている。「地域の環境を守り育てるのは、地域にしっかりと根ざして働き、日々暮らしていこうとする人々の共通の意識づくりと、協同の実践をおいて他にはない」というのがその最後の締めくくりである。全組合員経営とその発展としての「共感の経営」ということを21世紀へ向けたわれわれの中心課題としていく議論が進んできている。労働者協同組合の事業・経営が、自分たちだけのものではなく、社会全体のための存在であることが経営そのものの中に現れるよう、われわれの主体的力量を高めていくこと。河野さんのルポには、はからずもその内容が豊かに語られている。

「きんさんぎんさん」の共感、元名古屋大学学長、元名古屋市長、元名古屋市職労委員長、名古屋大学職組書記長など広範な人々が発起人に名を連ねてくれている愛知高齢者協同組合の準備。

「使うのも使われるのもいや、主人公として働きたい。たぐり寄せたら労協が」と、ワーカーズコープけやきと武蔵野在宅ケアシステムの仲間がセンター事業団に加盟。

高齢者協同組合が、今次６～８自治体集中行動の焦点である。６月末の理事会では、この点が中心的に議論されるとともに、事業の飛躍の課題が病院関連事業を皮切りに論議がすすめられた。無茶々園、黄柳野、Ｃ＆Ｃの参加によって、事業の具体的推進の議論に拍車がかかった。少しずつ、未来への歯車がかみ合い始めた。

鍛谷　宗孝（労協連合会・専務理事）

◉ センター事業団だより

第２次中期計画のスタートとなる総代会の成功から、すでに１月半が経った。両専務が連合会の新たな任務に移ったのを始め、役員体制も大きく変わった中で、人事に頭をひねり続けた期間でもあった。事務局員・事業所長がどんな状態にあり、どうすれば成長できるかが問われる仕事であり、決して安易にしてはならない責任感で苦悩したが、ようやくまとまって全国各地で移動が始まっている。

６月23日、東京事業本部が123運動の受賞記念パーティーを行い、200名を超える大盛会となった。特に、ここ数年間の改革の苦闘の中で得た、外部の人達の協力や援助に感謝をする、という主旨での催しでもあり、これは初めての出来事？でもあった。会は、仕事先の方々や東京地評・都職労の方々など、実に多くの方が出席され、大きな感動が又生まれた気もする。それは、組織を超えて社会のあり方を真剣に考えているもの同志の、不思議とも言うべき共感・一体感が広がってきた感動と、これから一層この輪が広がっていく期待でもある。考えてみれば、そもそも「協同」とは、こうした「目的」や「感動」や「未来」を共有する自然な人の営みなのだろうし、これが自然でなくなっているからこそ、「本物」にふれる如くの新鮮さや壮快さが生まれるのではないか。その意味で、「生命・労働・地域の再生」をうたった第２次中期計画の好スタートを切ったといえるだろう。第１回所長会議も「大砲」から自称「ピストル」打線の運営で、新鮮で意欲的なものとなった。人事は変わったが、目的への確信の深まりがみんなの中に座ってきた証ではないか。この勢いで第４次自治体集中行動を多彩に広げていきたい。

紹介が遅れたが、今回の人事で自分自身も新たな任務に立ち、こうしてこの「たより」を書いている。分不相応な任務に不安と恐怖を隠しきれないが、自分自身の発展を新鮮に追い求めていきたいと思いながら、盛岡日赤で未来と汚れを探しながらモップを振る毎日である。

古村　伸宏（労協センター事業団・事務局長）